

## 2015年度版



### 目次

1. 巻頭のことば	・・・1
2. 2016年度 共同研究発表会のお知らせ	・・・1
3. 2015年度 共同研究紹介	
①信州におけるまちづくりに関する基礎的研究	・・・2
②学生の精神的健康及び適応感の変化 ～学生へのアプローチ、研究へのアプローチ～	・・・3
③障害のある子どもの体力に関する研究	・・・4
④平和学の父ヨハン・ガルトウング考案による 紛争転換SABONAマット法を日本の学校教育の場で 展開するための方法の開発と普及	・・・5
その他の研究紹介	
⑤現代アート表現と連携させるアウトリーチ活動について	・・・6
⑥教育政策における背景としての地方創生の現状	・・・7
⑦ピンク・青の衣服が自動的な社会行動に及ぼす影響の検討	・・・8
4. 学術交流会 開催報告	・・・9
5. 研究所活動報告	・・・10
6. 参考資料：学内共同研究 公的研究費などの採択状況	・・・11
7. 編集後記	・・・11

## 巻頭のことば

Science is the belief in the ignorance of experts.

Richard Phillips Feynman (1918-1988)

ノーベル物理学賞を朝永振一郎博士と共同受賞したファインマン博士が、1966年、科学の教員へ向けて行った講演の中で使った表現。自然科学にとどまらず、すべての学知について当てはまるだろう。知的発見は、先立つ学知を疑うことなしにあり得ない。真理を希求する研究者は、いかなる権力や権威にも跪くことはないし、ましてや己の損得勘定で、データを改竄したり、誤った結論を導きだしたりすることはない。それなのに、僅かばかりの研究資金でも、外から受け取るためには、研究者は、不正防止のためのおびただしい数の確認項目にチェックを入れねばならない。研究者をとりまく世界はいまや性悪説一色のように見える。

最近、剽窃やデータの改竄が頻発する背景のひとつには、研究者が短期的に業績をあげることを強いられる事情があるだろう。かつてファインマンが批判した、常に自分の研究が世の中の役にたっているかというフリをしなければならないタイプの研究者が増えてしまったのである。一見、何の役にもたちそうにないけれど、知的な世界を豊かにし、やがて思いもかけない発見に結びつくような、そして、知ることそのものが面白くてたまらない、ファインマンのような研究をしていない、不幸な研究者が増えたということでもある。本学の研究者たちが、コンプライアンス遵守だけの研究者ではなく、知ることそのものが無性に面白いという幸福な研究者であり続けることを切に願っている。

## ◆2016年度 共同研究発表会のお知らせ

### 2016年度 共同研究発表会



清泉女学院 教育文化研究所

**日時** 2016年度5月25日(水)

**会場** 清泉女学院大学・清泉女学院短期大学 フランシスコ館 206教室

#### プログラム

##### 1. 開会あいさつ

学長 芝山 豊

##### 2. 成績成果発表(各15分程度)

- (1) 清泉女学院大学 人間学部 現代コミュニケーションコース 講師 山貝 征典  
信州におけるまちづくりに関する基礎的研究
- (2) 清泉女学院短期大学 幼児教育学科 教授 田中 秀明  
学生の精神的健康及び適応感の変化 ～学生へのアプローチ、研究へのアプローチ～
- (3) 清泉女学院短期大学 幼児教育学科 教授 小林 敏枝  
障害のある子どもの体力に関する研究
- (4) 清泉女学院大学 人間学部 英語コミュニケーションコース 教授 室井 美穂子  
平和学の父ヨハン・ガルトゥング考案による紛争転換SABONAマット法を日本の学校教育の場で展開するための方法と開発とその効果の測定
- (5) 清泉女学院大学 人間学部 現代コミュニケーションコース 助教 川北 泰伸  
教育政策における背景としての地方創生の現状
- (6) 清泉女学院大学 人間学部 心理コース 講師 石井 国雄  
ピンク・青の衣服が自動的な社会行動に及ぼす影響の検討

## 共同研究紹介 1

### 「信州におけるまちづくりに関する基礎的研究」

山貝 征典 (清泉女学院大学 人間学部)  
川北 泰伸 ( " )

#### 【研究目的】

中心市街地の空洞化により空き家が増え管理者不在になる問題、また先進的事例として有限責任事業組合などの新しい組織運営や、オルタナティブスペース（代替的施設・空間）の事例の台頭などが、新たなまちづくりに与える影響も少なくない。魅力ある建物や空間を有効に現代的に活用したり、単なるスクラップアンドビルドから現代的なりノベーションや有効活用へという動きはあるものの、やはり地道な民間企業や個々人の努力によるところも大きい。これらのまちづくり事例や問題、関係性などを、文化政策研究や芸術環境研究のフィールドから再考し調査することにより、未来志向の新たなまちづくりの施策や視点を発見することを目的とする。



#### 【学会参加、視察や意見交換報告の一部】

- 8/2：千曲商工会議所主催「ちくま未来カフェ」への参加
- 8/4：地域創造主催の東京芸術劇場（池袋）での「指定管理者サミット」への参加
- 8/22：自治体学会第29回奈良大会で「分科会：都道府県と小規模自治体との連携・役割分担」「分科会：連携・協働による政策形成とその手法」への参加
- 9/26：3331 Arts Chiyoda事務局に施設運営やマネジメントについての聞き取り調査／法政大学において開催されたシンポジウム「公立博物館・美術館の指定管理運営館の現状と課題」開催への参加
- 10/24.25：芸術環境研究会第6回全国大会（厚木）でオルタナティブ・スペースにおける現代アート作品の事例について発表
- 11/20：宇都宮市・うつのみや妖精ミュージアムにて、市直営体制での美術館運営の問題や現状等について聞き取り調査
- 11/27：千曲商工会議所主催「コワーキング・シェアショップに関する意見交換会」への参加
- 11/28.29：アート・マネジメント学会第17回全国大会「プライベートとパブリックの芸術経営ーあいちからの発信ー」への参加



#### 【成果と今後の展望】

信州におけるまちづくりのフィールドにおいて、大学・高等学校・社会教育施設などが関係する産学官連携や地域連携について掘り下げ、ネットワークを構築する基礎的研究を進めた。国内の関連施設や企画・展覧会等の視察、興味深い事例に携わっている人物との意見交換、学会やシンポジウム、研究会への参加や発表、情報収集などを実施。また外部からの視察受け入れを積極的に行い、長野市での清泉女学院大学権堂分校での活動、リノベーションやまちづくり活動の様子を外部に発信している。

## 共同研究紹介 2

### 学生の精神的健康及び適応観の変化

～学生へのアプローチ、研究へのアプローチ～

眞榮城 和美 (清泉女学院大学 人間学部)

生井 裕子 (清泉女学院大学 人間学部)

田中 秀明 (清泉女学院短期大学 幼児教育科)

研究協力者：村中 泰子 (神戸大学 キャンパスライフ支援センター)

#### 1.研究目的

本研究は以下の2点について検討することを目的として行われた。

##### 【研究1】

学生が本学に適応するために、どのような取り組みが有効なのかを探索的に検討する。

##### 【研究2】

学内研修を行うことで、教職員の学生へのメンタル面でのサポートに対する効力感を向上させていく。また、そのプログラムの構築と効果測定を行う。



写真1 新入生対象イベントの様子(6月)

#### 2.研究の概要および成果

##### 【研究1】

・入学時、新入生対象に精神的健康度および大学適応感に関する質問紙を実施。早期に配慮が必要と思われる学生に対し、学生相談室の利用を促し、相談室を継続的に利用するケースも認められた。

・新入生対象に6月(パンケーキを作って自己表現)、全学対象として11月(クリスマスリース作り)、学生相談室の認知度を高める活動を行った。実施後のアンケートには「作っている時間が楽しかったです。」「何かに集中していると嫌なことも忘れていいなと感じました。」等の感想が確認された。

これらの活動を通じて、気軽に悩みを相談できる場としての学生相談室の存在を認知してもらうことが可能となったものと考えられる。



写真2 全学生対象イベントの様子(11月)



写真3 教職員対象ワークショップ(グループ討議)

##### 【研究2】

教職員対象に学生対応ワークショップを実施した(9月)。ワークショップ前後で、学生対応に対する効力感の変化について検討した。参加者の事後アンケートから「実演をまじえて大変良い研修会だと思います。」「学生の接し方、対応等、勉強になりました。」「学生の立場になって考えるという事を再認識出来た。」「今後の学生対応に生かしたいと思います。」等の記載が確認された。また、「情報の共有に繋がるので継続して欲しい」といった意見も寄せられており、本研究に取り組んできたことによる一定の成果が認められたものと考えられる。

#### 3.今後の課題

今年度の活動を通して、得られたアンケートデータに基づき、有効なプログラムの構築を目指す。  
本プログラムの効果について検証を重ねる(これまでに実施したアンケートデータの解析を進める)。



写真4 教職員対象ワークショップ(ロールプレイ)

## 共同研究紹介 3

### 障害のある子どもの体力に関する研究

小林 敏枝 (清泉女学院短期大学 幼児教育科)

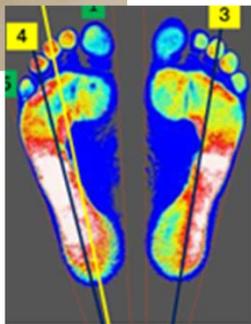
長谷川 孝子 (清泉女学院短期大学 幼児教育科)

研究協力者：加藤 光明 (長野赤十字病院 リハビリテーション科)

#### 1. 研究の背景・目的

近年、子どもたちの体力の低下が懸念されている。幼児期は運動発達が著しい時期であり、この時期の運動発達は学童期の運動発達に影響を及ぼすと言われている。特に、幼児期の運動遊びや全身運動の経験が重要となる。障がいのある子どもたちは、運動の困難性を抱えているケースも少なくなく、幼児期に獲得されるはずの運動技能が未獲得であることもある。運動面の困難性は見過ごされがちであり、運動発達への支援が遅れることもある。

このような背景を踏まえて、障がいのある子どもの運動発達支援を目的として、姿勢や歩行能力に関係の深い「足裏測定」「下肢アライメント」の測定を実施し、その実態を明らかにした。



#### 2. 研究概要

- 対象児：児童発達支援センターの子どもたち（2～6歳） 30名
- 測定項目：「足裏測定」「下肢アライメント」「体力測定」
- 足裏測定：土踏まずの形成・重心位置・浮き指
- 下肢アライメント：下腿骨、距骨、踵骨がなす下腿と踵の肢位関係、後足部骨配列の位置関係を示す。

#### 3. 考察

今回は、姿勢や歩行能力に関係の深い「足裏測定」「下肢アライメント」測定を行った。足部の状態は体重を支え、運動発達において大変重要な働きを示す。今回の測定から、立位姿勢の安定性・バランス能力に関係のある要因など、興味深い成果が得られた。今後は、測定項目間の相関や、継続観察による経時的変化についても検討していく予定である。

## 共同研究紹介 4

平和学の父ヨハン・ガルトゥング考案による紛争転換SABONAマット法を日本の学校教育の場で展開するための方法の開発と普及

室井 美稚子 (清泉女学院大学 人間学部)

寺門 正顕 (清泉女学院大学 人間学部)

### 1 研究目的

もめ事や紛争とどのように取り組んだら良いだろうか。そんな方法が存在するのであろうか。その一方策がノルウェーの平和学者ヨハン・ガルトゥング博士が考案して、わかりやすくスキルの落とし込んだのがSABONAマット法である。

その方法に関して、本研究には2つの目的がある。

- 1) ヨーロッパ生まれのSABONAを日本の精神風土と教室環境に合わせたバージョンを作成する。そのために、実践方法とワークショップを開発すること。
- 2) そのバージョンの有効性を計測して、さらに改良する。作成したバージョンの妥当性や有効性について計測し、さらなる研究を重ねていっそうの実用に供すること。



### 2 研究の概要

- ・方法論について検討して、ワークショップの在り方を研究した。
- ・SABONA紛争転換法のワークショップを実際に行い、方法について検討を重ねた。
- ・データ収集の対象を生徒の先生の両方にして、計測した。
- ・アンケートの内容を吟味した。
- ・教室環境やメンタリティーが異なるヨーロッパ生まれの方法なので、日本バージョンを創出した。
- ・日本の学校に導入するために、アニメなどのビジュアル・エイドを使って、理解を深めつつ時短の工夫も行った。



### 3 研究成果と今後の展望 等

- 成果**
- ・長野県内の高校などで高校生などにワークショップを行った。
  - ・大阪では、夏季の教員研修でワークショップを行った。
  - ・平成27年度の文科省の事業、ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI（研究成果の社会還元・普及事業）に採択され、本学で実施し効果を測定することができた。
  - ・それに基づいて、改良した。
- 展望**
- ・長野県でも教員研修で行える可能性が出てきた。
  - ・小学校などの特別活動や道徳などの時間に採用してもらおうべく、日本のクラスサイズやカリキュラムに合った教本を作成中である。
  - ・普及のための今後も多様な所でワークショップを行う。



## 個人研究紹介 1

### 現代アート表現と連携させるアウトリーチ活動について

山貝 征典 (清泉女学院大学 人間学部)

#### 【構想の概要】

現代アート表現ではその背景にある作者のねらいが、ある程度の美術の知識や歴史理解、社会と美術の関係、芸術表現とは何かという思想理解前提と不可分なものも多い。これらは普段から現代アート界をある程度知り親しんでいる人たち以外を寄せ付けず、ともするとせつかくのアート鑑賞の機会から観客を遠ざけ「よくわからない」という感想を持たせてしまうこともある。もちろん、わかりやすさや荘厳さ、いわゆる「絵のうまさ」などだけが表現の評価軸にはならない。しかし現代美術、現代音楽、現代詩、現代舞踊などの、同時代性そのものが表現要素に必要な芸術表現分野では、「好きなように感じて、好きなように観ればよい」という鑑賞への入り口の示しかたでは初心者にはハードルが高く、その魅力や本質が広がっていかないものも少なくない。美術鑑賞の楽しみの1つに「美しくはないが、気になる」というようなあいまいさの魅力がある。このような感情の揺れ・幅を許容しつつ、鑑賞の手助けになるようなかんたんな制作も伴う、参加型の現代アート作品によるアウトリーチ活動について実践・考察していく。



#### 【2015年の参加型作品《井皿》におけるコンセプトや構想】

- ・観客の参加は1工程で終わるような、シンプルな依頼とする
- ・子どもやお年寄り、家族連れなどが気軽に参加しやすい工夫
- ・ワンフレーズで説明できるような作業内容
- ・参加に時間がかからないこと、長くても3分以内程度
- ・作業時に絵の具などで来場者が汚れないように配慮
- ・参加してくれたかたにお礼に飴をあげる
- ・側から見て何をやっているかすぐにわかるような明快さ

#### 【今後の展望】

美術館やアートセンターなどではない、美術のフィールドとは関係ない場所で突然予期しないかたちでアートに触れることができる仕掛けは、本来アウトリーチを必要とする層に働きかけるのに有効となる可能性が高い。オーソドックスに絵画や彫刻を鎮座させ厳かに鑑賞させるというものよりも、ある程度イベント性が高く直感的に楽しみが伝わり、参加型でコミュニケーションが誘発されるようなものの可能性について実践や考察を進めていく。

## 個人研究紹介 2

### 教育政策における背景としての地方創生の現状

川北 泰伸 (清泉女学院大学 人間学部)

#### 1. 問題関心

地方創生を大きなスローガンに掲げながら、さまざまな分野で、さまざまな主体が、施策や事業に取り組んでいる。むしろ、地方創生という課題の優先順位が高まっているため、地方創生の文脈に沿った施策、事業を展開しなければ、予算の確保などが厳しい状況にさらされているとも言えよう。

そこで本研究では、今日の教育政策を検討することを念頭に、その背景として登場した地方創生の現状を明らかにすることを目的とする。地方創生の取り組みでは「産官学学金労言」が連携することを政府は強調している。この連携において、金融機関の役割にも焦点があてられているため、金融機関の存在についても検討を行う。

#### 2. 考察

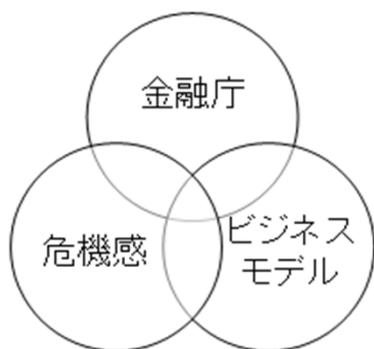
##### 2. 1 地方創生の現状

長野市と飯綱町を事例に検討を行った。地方創生の取り組みでは、施策・事業に優先順位をつけて資源を投下し、具体的かつ確実に成果を上げることが求められている。長野市では、市町村合併の経緯から優先順位をつけにくい状況があった。飯綱町では、地方創生人材支援制度を効果的に活用し、新しいまちづくりのネットワークを構築し、実現可能性が考慮された新しい取り組みが次々と展開されていた。

##### 2. 2 地域金融機関の役割

地域金融機関は、金融庁の監督行政の影響を非常に強く受けている。ただし、金融庁の意向の受けた取組みの程度は、地域金融危難で様々である。

地域金融機関は地域の産業の担い手である中小企業をサポートする存在として、また地域資源を生かしたビジネス創出・展開のサポート役として重要な役割を担い、且つ、最近ではビジネスによる地域課題の解決が行われている。この役目は、非営利組織や一民間企業、政府にとっては担いきれない。しかし、行政が地域金融機関に求める役割として現状ではそれほど多くない。また、いわゆる「政府の失敗・企業の失敗」の通り、地域金融機関はあくまで民間企業であり利益を上げ続けなければならないため、公共の利益に寄与するかどうかは経営判断に依存することとなる点は限界といえよう。



## 科研費研究紹介 1

### ピンク・青の衣服が自動的な社会行動に及ぼす影響の検討

石井 国雄 (清泉女学院大学 人間学部)

#### 1. 研究目的

「かわいらしさ」アピールのためピンク色の衣服を着たり、「クール」に決めるために青色の衣服を着ることがあるだろう。我々は日常生活においてたくさんの色に囲まれて暮らしているが、それらの色の使われ方には様々な社会的な制約がある。その制約は、我々の日常に意識化されることなく浸透しており、その制約があるがゆえに、我々の判断や行動も制約されている可能性がある。本研究は、現代社会においてジェンダーを表象する色とされるピンクと青を取り上げ、これらの色の衣服を着用が、我々の自己認知を変容させることを通して、ジェンダー・ステレオタイプ的特性に一致した判断や行動を生じさせる過程を明らかにすることを目的とする。



図1 たとえばトイレの男女マークにあるように、男性は青、女性は赤やピンクといった配色が一般に用いられる

#### 2. 2015年度の研究概要

##### 1) 女子大学生のジェンダー認知に及ぼす影響

東京都の女子大学生78名を実験参加者として、ピンクの衣服を着用したり、見ることが自己認知に及ぼす影響を検討した。参加者は、ピンクまたは紺色の布を身に着ける条件、またはピンクの布を見る条件に割り当てられた。ジェンダーに関する自己認知および将来の職業に関する意識が測定された結果、ピンクの布を見る条件において、能力に関する特性と比べて対人的な特性と自分を結び付ける傾向がみられた。このことは、ピンク色が伝統的な女性ステレオタイプである「能力は低い、あたたかい」を活性化させたためと考えられる。



図2 看護師は伝統的に女性的な職業であるため、ピンク色と結び付けられる可能性がある

##### 2) 看護学生の職業意識に及ぼす影響

首都圏の看護専門学生152名を実験参加者とした質問紙実験を行った。参加者は、ピンクの腕カバーまたは紺色の腕カバーを身に着けた状態で、看護師としての職業意識についての質問に回答した。その結果、ピンクの腕カバーを着用した参加者は、紺の腕カバーを着用した参加者と比べて、看護師キャリア意識、看護師としての高い地位を望む傾向が高くなっていた。こうしたことは、ピンク色を着用することが、伝統的な女性的職業である看護師として働くイメージをより連想させやすくしたことを示唆している。一方で、男性においてはピンク色の腕カバーを着用することによって、自分の対人的および能力的特性を低く評価する傾向がみられた。このことは、自分の性別と衣服のジェンダー性との不一致が影響している可能性がある。

#### 3. 今後の課題

2015年度の研究においては、ピンク色の衣服が伝統的な性役割に関連した認知や、看護師における職業意識に影響を及ぼすことが明らかになった。2016年度からは、認知の変化が判断や行動を生じさせる媒介過程を具体的に検討していく。また、衣服の色には自己呈示的な側面が強いため、異性の好みなど恋愛に関する態度や行動にも影響を及ぼす可能性がある。そのため、異性に対する好みを、視線の計測などを用いて影響を多面的に調べていくことも検討している。

## ◆研究支援活動

### 1. 文部科学省のガイドラインに沿った体制整備

2014年の文部科学省のガイドラインに沿った体制整備を継続して行い、2015年度から新たな規程等を整備し、実施を開始した。さらに年度の途中で規程や学内基準等の見直しを行い、以下の規程について、改正を行うことで研究支援・管理体制の充実を図った。

- ・研究における不正行為防止・対応規程(改正)
- ・公的研究費運営・管理規程(改正)
- ・個人研究費及び共同研究費運用・管理規程(制定)

### 2. 研究に関する学内研修の実施

前述のガイドラインにて定められた機関内での研修体制を整備し、以下のような研修を実施した。なお、2016年度以降も文部科学省等の公的機関のほか、他大学の情報を継続して調査し、実施方法および実施内容の検討を行う。

#### ①研究倫理研修

#### ②コンプライアンス研修

※学内のe-ラーニングシステムを利用したレポート等の提出方式

#### ③学生向け研究倫理教育

大学2・3・4年生および短大2年生(卒論・卒研に取り組む学生)に研究倫理に関するリーフレットを配布し、教員および事務局から研究倫理の重要性について、説明を行った。

### 3. 研究交流の活性化

2014年度に本学研究者が取り組んだ共同研究について、「2015年度共同研究発表会」を開催した。また、海外研究者との学術交流会として台湾の国立高雄第一科技大学との交流会を開催した。

開催日時:2015年11月26日(木) 16:15~17:15

開催場所:清泉女学院 S301会議室



## ◆学内共同研究

### ◇2015年度

所属	代表者	研究課題名
大学	山貝 征典	信州におけるまちづくりに関する基礎的研究
大学	村中 泰子	学生の精神的健康及び適応感の変化 ～学生へのアプローチ、研究へのアプローチ～
短大	小林 敏枝	障害のある子どもの体力に関する研究
大学	室井 美稚子	平和学の父ヨハン・ガルトゥング考案による紛争転換SABONAマツ法を日本の学校教育の場で展開するための方法の開発と普及

### ◇2016年度

所属	代表者	研究課題名
大学	川北 泰伸	信州におけるまちづくりと大学の研究に関する基礎的研究
短大	碓井 幸子	人口減少時代における子育て支援に研究 ～長野県における第2子以降の子育て環境、条件を探る～
短大	小林 敏枝	障害のある子どもの体力に関する研究
短大	田中 秀明	学生の精神的健康及び適応感の変化 ～学生へのアプローチ、研究へのアプローチ～

## ◆外部資金申請・採択状況

### ◇2015年度 科研費採択状況

	申請者	研究種目	課題番号	研究課題名
大学	芝山 豊	基盤(C)	26370088	聖書翻訳史から見るモンゴルのキリスト教思想
	眞栄城 和美	基盤(C)	26380962	移行期にみる子どもの自己有能感・社会的受容感の機能
	石井 国雄	若手研究(B)	15K17255	ピンク・青の衣服が自動的な社会行動に及ぼす影響とその媒介メカニズムの検討
短大	矢上 克己	基盤(C)	26380826	新潟県社会福祉史の総合的研究

### ◇2016年度 科研費採択状況

	申請者	研究種目	課題番号	研究課題名
大学	芝山 豊	基盤(C)	26370088	聖書翻訳史から見るモンゴルのキリスト教思想
	石井 国雄	若手研究(B)	15K17255	ピンク・青の衣服が自動的な社会行動に及ぼす影響とその媒介メカニズムの検討
短大	矢上 克己	基盤(C)	26380826	新潟県社会福祉史の総合的研究

≪編集後記≫今年度より思いかけず研究支援に携わることになりました。この編集をすることにより、研究内容・成果を多くの方にお伝えすることに励みたいと感じました。(事務局)

#### ■お問い合わせ先

清泉女学院 教育文化研究所  
〒381-0085 長野市上野2-120-8  
TEL:026-295-1301 FAX:026-295-6420

E-mail : [keiei-kenkyu@seisen-jc.ac.jp](mailto:keiei-kenkyu@seisen-jc.ac.jp)  
URL : <http://www.seisen-jc.ac.jp/>